

# 知的障害のある児童生徒のキャリア発達を促すための キャリア・パスポートの活用に関する研究

—目標の具体化と学習との関連付けを図るためのツール開発と効果的な対話の在り方の検討—

○石羽根 里美

菊地 一文

（千葉県立夷隅特別支援学校）

（弘前大学大学院）

KEY WORDS: キャリア発達 キャリア・パスポート 対話

## 1 目的

新学習指導要領の総則に「児童又は生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としてつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と明示された。また「キャリア・パスポート(以下、CP)」例示資料(2019)では「児童生徒が自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりして自己評価を行い、主体的に学びに向かう力を育み自己実現につなぐこと」や「教員の対話的な関わりによって児童生徒の成長を促す系統的な指導」が現在求められている。これらのことから、児童生徒の願いを捉え、対話を通して目標設定を支援するとともに、児童生徒が振り返りを積み重ね、学びを意味付け、価値付け、関連付けできるようにすることが必要であると考えた。そこで、本研究ではツールの活用と教員の対話的な関わり方の2点を踏まえ、実践を通してCPの活用に関する有効な手立てや支援の方策を明らかにすることを目的とした。

## 2 方法

**対象:** A特別支援学校（知的障害）に在籍する小・中・高等部児童生徒 19 名及び担任教員 8 名。

**実践研究:** 児童生徒の願いと学びをつなぐ有効な方法を明らかにするために、①マンドラート（今泉，1987）の手法を参考に、本人の願いを踏まえて具体的な目標を設定する「願いシート」「目標シート」（以下、シート）を開発し、「定期的な振り返り」を行った。また、②児童生徒の気付きを引き出す対話的な関わり方の充実のために、適切な問いと応答を検討する「対話チャート」を作成し、それに基づく竹村・柳川(2019)を参考とした「教員の学びあい」を実施した。

③これらの有効性を検証するために教員と児童生徒を対象とした半構造化インタビュー及び教員への事後アンケートを実施した。事後アンケートでは、各取組について4件法での評価と自由記述を求め、実施前後で比較した。

## 3 結果

### （1）「シート」活用と定期的な振り返り

本人の願いを踏まえた必要な学びの可視化、具体化と定期的な振り返りにより、すべての事例において児童生徒が達成したことや努力したことを教員と共有し、目標修正や今後に向けた行動の意思決定を積み重ね、目標を意識して行動する姿が見られた。小学部児童Aは、「かつこいい〇年生」と目標を設定し、そのために必要なこととして「苦手な野菜を食べる」を具体目標の一つとした。従前は教員が勧めても食べようとしなかったが、目標設定後は自分から苦手な野菜を食べることができた。また、掲示した目標シート

を指し、自分のできたことや将来に向けた希望を教員に話す等、いま取り組んでいることとその先にある目標とのつながりを意識している姿が見られた。高等部生徒Bは学習の必要性に気付き課題を持ち帰るほか、なりたい自分に向けてこれから頑張りたいことを考えるなど、自己理解の深まりや課題の捉え方に変化が見られた。

### （2）「対話チャート」の作成と「教員の学びあい」

事例を基にした「対話チャート」を用いて、生徒の気付きを促すための具体的な問いや応答について教員間で共有し検討を繰り返すことで、効果的な対話方法の気付きや仮説形成につながった。また、「教員の学びあい」では生徒と教員との対話場面をVTRで視聴し、気になる発言等の事実から内面を推察し、考えられる解釈を共有することにより、解釈の共通点と差異への気付きが得られ、児童生徒理解の深まりが見られた。教員自身のかかわりの振り返りにもつながり、対話において大切にしたいポイントが確認できた。

### （3）教員と生徒へのインタビュー調査

教員へのインタビューでは、「目標を具体化、細分化することで、子どもにとって分かりやすく達成しやすい目標を立てることができた」「目標が達成される実感を得られ、子どもにも教師にとっても目標が立てやすい」等、目標設定支援における有効性に関する意見が多く挙げられた。なお、事後アンケートの結果を点数化し比較した結果については、「児童理解の深まり」「願いを踏まえた目標設定に関する意識」等の半数以上の項目において実施後の数値が上昇し、低下した回答者及び項目は見られなかった。

生徒へのインタビューでは、「できたこと・できていないことを自分で判断できるようになった」、「将来に向けて考えるのが楽しかった」等、肯定的な意見が挙げられた。また、「目標を作ること、何をやれば良いか考えるのが難しい」と話していた生徒が、「目標をもてるようになって嬉しい。目標が立てやすくなった」と、目標を決めることへの思いが前向きなものに変化した。

## 4 考察

以上の実践の結果を通して、児童生徒自身が学ぶことと自己の将来をつなぐためには、本人の願いを踏まえたツールの活用と対話によって得られた気付きを「可視化」「具体化」「共有化」することが有効であると考察した。また、そのためには複数の教員による事実と解釈を踏まえた児童生徒の学びの見取りと協働解決の積み重ねが有効であり、そのための効果的な研修が必要であることが示唆された。文献 竹村哲・柳川公三子(2019)特別支援教育のアクティブ・ラーニング.中央法規出版。

(ISHIBANE Satomi, KIKUCHI Kazufumi)